

ネギ葉枯病（黄色斑紋症状）の発生について

1 病害虫名：ネギ葉枯病
(病原菌 *Stemphylium vesicarium*)

2 作物名：ネギ

3 発生経過

平成26年7月に県北部の露地栽培ネギにおいて、葉身に黄色斑紋症状や黒斑病に酷似した紡錘形～楕円形の褐色病斑の発生が確認された。農業試験場病理昆虫研究室及び当センターで発病株から病原菌を調べたところ、*S. vesicarium* であることが確認された。ネギ葉枯病は古くから知られている病害であるが、本県においてネギ葉枯病菌による黄色斑紋症状の確認は初めてである。

4 病徴

本病は葉や花茎に発生する。葉先や葉身中央部にはじめは白色の小斑点が生じ、後に紡錘形～楕円形の病斑（褐色楕円形病斑）を形成し、暗褐色すす状のかびを生じる（図1、2）。また、中心葉に退緑小斑点や黄緑色の不規則な斑紋症状（黄色斑紋病斑）を生じる（図3）。

なお、本病の褐色楕円形病斑は、黒斑病（図4）と酷似しており、肉眼での判別は困難で、顕微鏡による確認が必要である（図5）。



図1 褐色楕円形病斑



図2 葉先の病斑



図3 黄色斑紋病斑



図4 黒斑病の病徴



図5 葉枯病菌の分生子（左）
※右は黒斑病菌の分生子

5 病原菌の特徴

- (1) 罹病残渣中で生存して伝染源となり、分生子が風によって飛散する（空気伝染）。
- (2) 生育適温は25℃付近で、降雨が多く、湿度が高い時期に発生がしやすい。特に、梅雨や秋雨の時期や曇雨天が続く時に多発しやすい。

6 防除対策

- (1) 前作で多発したほ場では、病原菌の密度が高いため、連作を避ける。
- (2) 土壌pHが低い場合や窒素過多の場合に発生が多くなる傾向があるため、適切な肥培管理に努める。
- (3) 多湿条件は発生を助長するため、ほ場内の排水対策を講じ、低湿地での栽培は避ける。
- (4) 発病葉（罹病残渣）は伝染源となるため、放置せずほ場外へ持ち出して適切に処分する。
- (5) 発生初期に薬剤を散布する（表参照）。

表 ネギ葉枯病の登録薬剤（平成26年8月15日現在）

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	成分名	系統
アミスター20 フロアブル ※1	2000倍	収穫3日前まで	4回以内	アゾキシストロビン	ストロビルリン
ダコニール1000 ※2	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	TPN	有機塩素
ポリバリン水和剤 ※3	1500倍	収穫14日前まで	3回以内	イミノクタジン酢酸塩	グアニジン
				ポリオキシ複合体	抗生物質
テーク水和剤	600倍	収穫14日前まで	3回以内	シメコナゾール	DMI
				マンゼブ	有機硫黄
プロポーズ顆粒水和剤 ※2 ワイドヒッター顆粒水和剤 ※2	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	ベンチアバリカルブイソプロピル	アミノ酸アミドカーバメート
				TPN	有機塩素
アミスターオプティフロアブル ※1※2	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	アゾキシストロビン	ストロビルリン
				TPN	有機塩素
ベルコート水和剤 ※3	2000倍	収穫30日前まで	3回以内	イミノクタジンアルベシル酸塩	グアニジン

※1 アゾキシストロビンを含む農薬の使用回数は4回以内

※2 TPNを含む農薬の使用回数は4回以内（土壌灌注は1回以内、散布は3回以内）

※3 イミノクタジンを含む農薬の使用回数は3回以内

詳しくは、農業環境指導センターまでお問合せください。

TEL 028-626-3086

<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>